

学位論文（要旨）

学習者の自己内対話を促す 文学的文章の読みの学習指導に関する研究

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

武田 裕司

国語科は「ことばの力」を育てることを目的とする教科であるとされ、特に読むことの領域においては「自立した読者」の育成が目指されてきた。この「自立した読者」という概念に関して山元隆春は、「社会生活の中で、一人で読むための力を子どもものにしていく」ことを読みの教育の意義として重視しており、「自立した読者として学習者を育てていくには、読むことについての意識を学習者の内に育てていく必要がある」ことを述べている。「社会生活の中で、一人で読むための力」とは、この複雑化した現代社会の中で必要な情報を取捨選択しながら、自らの人生について見つめることのできる力のことであろう。つまり、読むという行為を通して自らを振り返ることや社会との相関の中で自らを捉えることを「ことば」によって行うことのできる学習者の育成が目指されているといえる。その際に、文学的文章のもつ価値は大きい。文学的文章を読むという行為は、その文章世界を「追体験」することであり、そのことによって現実の世界をも見据え、考え、葛藤する起点となる。このように、文学的文章を読むという行為は、「私」という存在について追究する契機となりうるものである。

しかし従来の文学的文章の学習指導においては、学習者のうちには複数の「自己」が存在しているにもかかわらず、これまでの学習指導では学習活動として、自分の意見を発表させることや書かせることによって、学習者のうちに存在するさまざまな「自己」を表出させることなく、むしろ教師が抑圧してしまう危険性があったことが指摘されている。このことから、指導者が学習者の「自己」をどのように捉えているのかという問題とともに、教室において文学的文章を読むことの意味の再検討の必要性がある。現在、読みの学習指導の目標が「自立した読者」の育成にあることは自明である。しかしながら、この「現代社会において一人で読む力」がどのようなものなのか、その内実については検討の余地があるといえる。「現代社会」がどのような状況であるかを明確にしたうえで、「自立した読者」の指す姿や求められる力について明確にする必要がある。ここに第一の研究課題が設定できる。

この「自立した読者」を育成するにあたって、学習者内の複数の自己を抑圧することなく、学習者が「私」という存在について追究するために学習者の「自己内対話」に着目する必要がある。その際に、文学的文章を読むことによって読者の内に何が起こっているのかという問題と、その文学的文章を教室で読むことの意義の両側面から、「自己内対話」について検討する必要がある。このことから、二点の研究課題が設定できる。

一つ目は、読者の読みの過程を明らかにすることである。文学的文章を読む際の学習者の内実を明らかにすることは、「自己内対話」が学習者の内でどのように行われているかについて検討することである。先行研究において、学習者の「自己内対話」についてその過程を詳細に論じたものは見られない。

二つ目は、そのような学習者の内の「自己内対話」を活性化させる学習指導とはどのようなものであると考えられるのかについてである。文学的文章を用いた学習指導によって学習者の「自己内対話」を活性化し、文学的文章を我がこととし、学習者自身が「私」というものを追究する契機とするためにはどのような学習指導をおこなっていくことが出来るのだろうか。この問題を克服するための学習指導の在り方が問い直されるべきである。

以上を踏まえ、本研究では、以下の三点の研究課題を設定する。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①「自立した読者」概念の再検討②文学的文章の読みにおける「自己内対話」過程の解明③文学的文章の読みの学習における学習者の「自己内対話」を促進する指導法の解明 |
|--|

第1章「文学的文章の読みの学習指導研究における「自己」の取り扱われ方」では、文学的文章の読みの学習指導研究と授業実践を、目標と指導方法の観点から検討し、研究課題を設定した。まず、文学的文章の読みの学習指導研究における目標論において学習者の「自己」というものがどのように捉えられてきたのかについて整理検討した。そこでは、自ら主体的に作品と向き合い、作品に対して「自己」と関連づけながら「意味づけ」を行うことのできる事が論じられていた。

次に、授業実践において学習者の「自己」がどのように捉えられてきたか、また学習者が「自己」について追究するものとなるためにどのような学習指導がなされているのかという観点から分析を行った。そこでは、学習者が「自己」を追究する際の学習過程、そして指導過程が明確になっていないことが課題として挙げられた。

以上を通して、①「自立した読者」概念の再検討、②文学的文章の読みにおける「自己内対話」過程の解明、③文学的文章の読みの学習における学習者の「自己内対話」を促進する指導法の解明という三点を研究課題として設定した。

第2章「文学的文章の学習指導における「自立した読者」概念の再検討」では、文学的文章を読んで自らを振り返る「自己内対話」の重要性を指摘し、そのことが「自立した読者」となるための大きな条件の一つであることを論じた。現代のポストモダン社会に見られるアイデンティティとして複数化・断片化・流動化したアイデンティティ観が指摘される。そこでは、アイデンティティ形成の場が「多」領域化していることが挙げられ、「自己」をめぐる問題が複雑化していることが示されている。このような社会状況の中で「一人で読む」ことのできる「自立した読者」には、複数化・断片化・流動化した「自己」同士を対話させる「自己内対話」を絶えず行い、新たなものを生み出す力が求められると考える。「自立した読者」概念を「自己」という面から再検討することによって、「自立した読者」に求められる力を明確に提示した。

また「自立した読者」育成にあたって、教室における学習者の「キャラ」についても検討した。学習者が他者からの期待に応え、「キャラ」を演じることによって成り立つような授業であってはならない。文学的文章の学習において真に重要なことは、学習者自身が「自分」というものを探ろうとすることであり、それに向けて自己内対話がなされることであることを述べた。

第3章「文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」」では、学習者の「自己内対話」を説明するための理論的枠組みとしてハーマンスらによる「対話的自己」論を取り上げて考察した。自己の世界が分権化され、さまざまな自己を認めつつ、そこにポジショニングして「他者」である他のポジションの「自己」と対話することによって、さまざまな発見や葛藤が生まれ、自己形成がなされると考える点、また自己内対話を「複数のIポジションどうしの声の交換」として理論化しており、「内部」と「外部」ポジションの「往還」を重視しているという点において、ハーマンスらの論はこれまでの自己論を超え、現代における「自己」を考えるにあたって意義のあるものである。この「対話的自己」論を援用し、文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を構想した。そしてこのモデルの有効性を検証する観点として、「文学的文章の〈対話喚起性〉を明らかにすること」「文学的文章を読む際の読者の「自己内対話」の過程を明らかにすること」の二点を設定した。

第4章「文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を用いた教材分析」では、先に検討したモデルを基としながら、教材分析の面からモデルの有効性について述べた。「自己内対話」を行うことが「自立した読者」となるための要素であり、そのために「登場人物」や「語り手」といった「他者」

の思考構造を体験することがもたらすものは大きい。その点において、学習者の自己内対話を促進させるものとしての文学的文章の価値を明らかにした。文学的文章を読むという行為において、読者は様々なポジションに立つと考えられる。そのことによってさまざまなポジション間での対話が生み出されるところに文学的文章の価値があることを明らかにした。また、「語り手」に着目することによって、読者が自らを振り返る契機となることを述べた。

教材分析の面からモデルの有効性について検討をすると、文学的文章を読むことによって、読者はどのような立場に立つことができるのかを明示的に示すことができる。また、そのような複数のポジション同士を対話的關係にするためにはどのような学習指導が考えられるのかを検討する手掛かりとなることも述べた。文学的文章を教室で読む際には、学習者の内に自己内対話が喚起される過程に目を向けることが重要である。特に、「語り手」という立ち位置に読者が立つことは重要なことであることがモデルを用いた教材分析によって示すことができた。

一方で、そのような立ち位置に立つことの困難さがモデルを用いて検討することによって問題としてあらわれた。読者が「語り手」に対して意識的になっていない場合にはどうしても読者は「語り手」のポジションに立つことは難しい。学習者に対して指導者が「語り手」に意識的になるように学習活動を設定しても、なかなか「語り手」という概念を理解することが困難であることや、その「語り手」というポジションに立つことによって新たな解釈が生み出されないといった問題が実践報告には課題として述べられていた。「語り手」というポジションを学習者が獲得するためには、学習指導における検討が必要であるといえる。

第5章「学習者の自己内対話過程の検討」では、実際の学習者の反応分析からモデルの有効性について検討するために、以下の二つの仮説を設定し、考察を行った。

仮説Ⅰ「異なるⅠポジションに立つことによって、読者は新たな発見や異なった解釈を行うことができる」

仮説Ⅱ「読者の内部ポジションと外部ポジション間に対話を起こすことにより、自らの価値観を対象化して振り返ることができる」

はじめに、「語り手」というポジションを学習者がどのように獲得し、それによって何が生み出されるのかについて検討を行った。その結果、「語り手」に着目した読みの段階性に関しては、小学校4年生段階においては語り手を認識することができており、その語り手がどのような「物語内容」を語っているのかについては捉えることができていた。小学校6年生段階においては語り手の語る「作品の表現や作品構造」についても目を向けることができており、小学校中学年から高学年にかけてが「物語内容」を捉える段階から「作品の表現や作品構造」に目が向けられるようになる移行期であると言える。また、中学2年生段階になると「語り手の立場性」に対する反応も増加する。特に語り手が語ることを批判的に捉える反応が見られることが特徴的であり、このことは自らの読みを対象化する契機となりうるものであると考える。「語り手」に着目して読む前後の反応の差異に関しては3タイプの特徴が見られた。①『蜘蛛の糸』という作品に対して意味づけて解釈を行うことができているもの ②『蜘蛛の糸』という作品に対して以前とは異なる意味づけで解釈を行うことができているもの ③登場人物に対して新たな視点から評価することができているもの、である。ここで行われる解釈に様々なバリエーションが生み出されるこ

と、またそれによって文学的文章と自らとを関連づけて読む契機を読者に与えることが「語り手」に着目して読むことの意義であるといえることを明らかにした。つまり、異なる I ポジションに立つことによって、読者は新たな発見や異なった解釈を行うことができることが明らかとなった。

次に高等学校における実験授業では、分析の結果、仮説 I に関しては学習者の記述から、新たな発見や異なった解釈を行うことが確認できた。また、仮説 II に関しては、読者の内部ポジションと外部ポジション間に対話を起こすことによって、自らの価値観を振り返ることのできる学習者は、少数であったものの存在し、その前段階とみなすことのできる学習者が複数存在することを明らかにした。そして自らの価値観を対象化して振り返ることにつなげるためには、他者との対話が行われ、自らの読みをメタ的に捉えることのできる力の育成が必要であることを述べた。

ここまで二つの調査の結果から、様々なポジション(語り手や他の登場人物)に学習者を立たせることは、新たな発見や解釈を生み出すこととなることや、学習者の既有知識や体験と文学的文章をかかわらせて読むことによって、学習者が自らを振り返る契機となることを明らかにした。しかしその際には、学習者が自らの様々なポジションから発する声をメタ的に捉えることのできるポジションに立つことが必要であることを述べた。そのことを踏まえたうえで文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデルを再構成したものが上のものである。文学的文章を読むことによって、読者は様々なポジションに立つことができる。その際に、語り手ではない他の登場人物のポジションに立つことは、「私」という今まで読者が立っていたポジションを見つめることである。そこには新たな発見や解釈が生み出される。

また、文学的文章と読者の既有知識や経験をかかわらせて読むことによって、読者は自らの「内部ポジション」と「外部ポジション」を往還する形で自己内対話を行うことになる。このことは、自らの価値観やものの見方を振り返る契機となりうるものである。しかしその際に重要となることは、それらの様々な声をメタ的に捉えることのできるポジションを読者が獲得することである。このことによって読者は自らの内の様々なポジション同士を対話的な関係へと導くことができるといえる。

そして、語り手に着目して読むことは、自らと文学的文章をかかわらせて読むことであり、また「語り手の立場性」に目を向けることは、自らを振り返る契機となるものであることを明らかにした。

第 6 章「学習者の自己内対話を促進するための学習指導」では、「ナラティブ・アプローチ」という手法に着目し、学習者の自己内対話を促進するための学習指導について検討した。現在、様々な分野においてナラティブという概念が注目されており、ナラティブの定義に関しては必ずしも一定のものがあるわけではないが、「物語、語り」といった語が類義語として用いられている。特に Narrative という英語には「筋/プロットを通じて複数の出来事がつなげられ、一つのまとまりをもって区切られる言語形式」と言う特徴があることが指摘されている。このようにナラティブは「個別の体験を当事者の立場から描くことにおいて有力な視点を提供する」ものであるとされる。

ナラティブ・アプローチは学習者が自らと向き合う学習を可能にする有効な手がかりである。学習者それぞれが自らの物語をその登場人物ごとに紡ぎ、学習者同士で聴きあう。それによって他者との「共有」に目を向けることとなり、新たな読みや考え方を得る契機ともなり得るだろう。そして、そこで合意形成を行って終わるのではなく、もう一度自分一人で本文に立ち返ってみることが必要である。そしてその物語を語ることによって、自らを内省することへとつながっていくことを述べた。

これまでの文学的文章の読みの学習指導においてなされてきた「(登場人物の)気持ちはどういうものでしたか」という問いに対しては批判がなされている。それは、「ナンデモアリの読み」や「読みのアナー

キー」と呼ばれる、作品を離れた「空想」のような読みをも許容してしまう状況を生み出してしまふからだ。そのような読みではなく、他の登場人物からはどのように見えたか、という「相貌」を問題にしていくことが重要であることを述べた。。このことは、これまで検討してきた「文学的文章の読みにおける学習者の自己内対話モデル」に当てはめて考えるならば、「異なったIポジションに立つ」ということであり、そのポジションのもつ声(voice)に意識的になることである。その際に重要なことは「作品に現れているものをしっかりと受け止めること」が重視されているという点である。作品の世界、描かれているものを細部までしっかりと読み込んだうえで、様々なポジションに立ち、そのポジションから発せられる声に意識的になること。そして、そこで生まれた声を他者と交流させることによって、自分がなぜそのような声を生み出したのかということに自覚的になることが求められているといえるだろう。このことは先に述べた「メタ的なポジション」を学習者が獲得するための大きな契機となりうるものであることを述べた。

文学的文章は多層的な世界である。これまで検討してきたように、文学的文章は読者に様々なポジションに立つ契機を与えるものであり、そのことによって読者は自己内対話を行うことになる。しかしながらこの自己内対話が、読者が自らを振り返ることとなるためには、「メタ的なポジション」に立ち、自らの自己内対話を見つめることが重要となってくる。教室で読むことの価値はここにあらわれる。つまり、自らを振り返るとともに、社会と自らとの関係を探るという「自立した読者」となるために、文学的文章を教室という場で他の学習者とともに読むということは、外界である社会と自らとをつなぎ媒介してくれるものなのである。それゆえに、教室という場において、自らの物語る声(voice)に意識的になり、そしてお互いの物語る声を「聴きあう」場を作り出すという「ナラティブ・アプローチ」は大変重要なものであり、そのことを視野に入れた学習指導の開発を目指した点に、本研究の価値があることを述べた。